

常行堂 一棟（重文）

最澄が深く影響を受けた中国天台宗の宗祖・智顛が、天台仏教の最高の教典である『摩訶止観』に記した四種三昧の一つ、「常行三昧」の修行のための道場。常行三昧院とも呼ばれる。常行三昧とは、阿弥陀仏を本尊とする堂内で、90 日間にわたって、常に阿弥陀仏の名を唱え、心に阿弥陀如来を念じながら歩き続ける修行である。

その間、横になることは許されず、眠るときも立ったままでなくてはならない。やがて三昧と呼ばれる高い集中状態に入ると、仏を目の当たりにするので、仏立三昧（ぶつりゅうざんまい）とも言われる。今でも堂内ではこの修行が行われているため、周囲の静寂を保つ必要がある。

常行堂は東塔、西塔、横川のそれぞれの地区にもかつてはあったが、現在は西塔の常行堂のみが残っている。